



秋岡芳夫が残したモノ

の木工熱は高まりを見せていきました。しかし、実際は材質、デザイン、塗装、乾燥とわからないことばかりでしたので、木工関係の本をひっくり返しているうちに会ったのが秋岡氏の著書でした。たまたま秋岡氏の父親が図書館人の大先輩であったことが分かり、当時、社会教育課長・図書館長・地域産業開発センター所長の三役を兼ねていた澤田正春氏が、そのすじの紹介で秋岡氏へ講演を申し込み、願わくばモノづくりの心髄を深く掘り下げて聞きたいと考えました。「木と暮らしのデザイン」と題して講演した秋岡氏は、「身近過ぎて見過ごしてきた資源、暮らしや生産と結びついた技、これらをもう一度見直すことから新たな生活文化を創造する」という工芸的な視点でのまちづくりデザインを説き、多くの町民に感銘を与えました。秋岡氏は、講演後の懇談会で木工口口機の導入による器づくりを提案し、エゾ松のアテ材（偏芯材）を使い、後に置戸と曲げ桶の「オケ」に「クラフト」を組み合わせて名付けた「オケクラフト」の誕生へと導きました。秋岡氏はその後も幾度となく置戸を訪れ、過疎対策や地域経済の底上げ効果も狙った「クラフトパーク計画」

策定の中心的役割を担うなど、置戸のまちづくりグランドデザインに大きな示唆と影響を与え続けました。置戸では現在、直接・間接に秋岡氏の教えを受けた19人の作り手たちがそれぞれの工房で生産活動を続けており、来年、オケクラフトは誕生から30年という節目の年を迎えます。

■託された秋岡コレクション

秋岡コレクションは、秋岡氏が、半生をかけて収集した日本の生活用具や宮大工の道具など18,000点からなる資料です。秋岡氏は、工業化社会の中で失われていく手の技、特に日本の木工技術に注目し、未来へ残すことをライフワークに、講演等で訪れた全国各地でこれらの資料を収集しました。秋岡氏は、「生産教育」という社会教育活動で暮らしの向上と地域産業の創造に取り組んでいる置戸に思いを寄せ、コレクションを置戸に移管する計画を立てました。秋岡氏亡き後、ご遺族から貴重な資料の一括寄贈を受けた置戸町では、どま工房にてこれら資料の研究、分析、製本化作業を進め、日本の手仕事文化の情報発信を続けています。